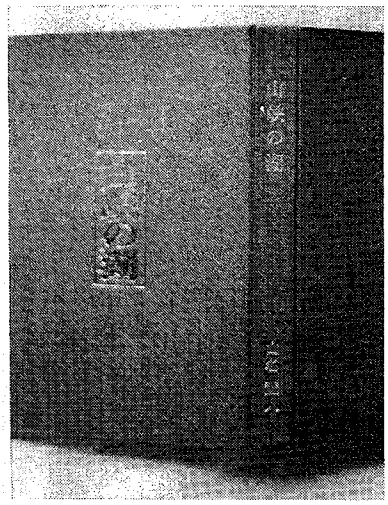
は、琴、詩吟、民謡などが発表され好評を博した。

文化協会は、他の連合組織と異なり、横の連携が難しく、リーダーの転出、交代などによって、その盛衰は厳しく、運営は極めて困難であるといわれるが、当文化協会は、年一回の総合発表会を主標として、各単位集団の自主的文化活動の実践により、地域文化振興の推進のため努力を続けている。

山名薫人と金山潮音会　金山の山名薫人は、本名を林蔵といい、明治三一年（一八九八）元旦に、香川県三豊郡中姫村で出生、幼少にして両親と渡道、長じて現役兵として大正六年（一九一七）札幌第二五連隊に入隊、同八年（一九一九）、父の在住していた本村金山に帰還した。少年期から文学に憧れ、特に、当時は良寛、西行の短歌、一茶の俳句を熱愛魅了し、旭川の歌路白哉（加藤林四郎）の歌誌「北の精」に参加、作歌活動に取り組むことになった。



歌集　山名薫人「山峡の湖」

その後、大正九年（一九二〇）、小田観蛍を知り「潮音」（主宰太田水穂）へ入社することになるが、その出会いと金山潮音会創設の経緯などについて、山名薫人歌集『山峡の湖』（註・昭和五二年六月一七日発行、発行所は潭の会＝札幌市＝、編集発行者山名康郎）に登載の「私論・山名薫人抄」（山名康郎記）には、次のように述べている。

富良野町鳥沼小学校長の潮音派歌人、小田観蛍が処女歌集「隠り沼」を刊行したのは大正八年十月であったが同門の加藤林四郎からこの歌集を見せられ、真実味溢れた歌柄に心をゆさぶられた。そして年の明けた一月上旬、金山から約十数キロの雪の原野をスキーで走り、鳥沼を訪れ、短歌に情熱を打ち込んでいる観蛍の純一な姿にすっかり感激、その年の秋、太田水穂主宰の「潮音」の門流に加わった。薫都と号し、句作、作歌の両面で活躍、部落の青年を刺激、金川不流子、木原翠松、下田露葉らが仲間となった。観蛍との関係が密接になるに従い、次第に俳句から短歌へ精魂を傾けるようになり、金山潮音会を結成、十三年に歌誌「霊光」を発行し、その精進ぶりは異彩を放った。この「霊光」には、小田観蛍、米倉久子、野沢柿葦らの潮音幹部をはじめ小助川浜雄、清水権録、金川不流子、木原作一、金子静光、野原北嶺（水嶺）、鬼川俊蔵、加藤林四郎、田村春洋、梶浦たね子らも出詠、道内における潮音派の大きな拠点となった。

このころ、金山潮音会は毎月、歌会を開いて作歌活動を展開した。昭和二年八月一九日、小田観蛍を迎えて金山歌会を開いたが、当日、参加した主な歌人は、小田観蛍、山名薫人、金子静

光、堀恭一、川村濤人、清水権録、野原水嶺、田村春洋、金川不流子、西川青濤、岡彩霞、森田藤八、中田清子ら二四人であった（前掲書『山峡の湖』）。

金山潮音会は、大正中期から昭和初期にかけて、富良野地方潮音の中心的存在であったが、同人の離村や死亡が続き、昭和一〇年以降は、中富良野方面へと移った。

当時、金山には入江君彰草や山名菊栄らの女流歌人もおり、山名康郎は、父薫人、母菊栄の薫陶を得て、昭和一二年の学生時代から作歌に精進し、札幌へ雄飛する基礎を形成、現在、北海道の歌壇で活躍中である。

薫人は昭和四年、村会議員に就任、九年には北海タイムス（現北海道新聞）の中部版歌壇選者となった。一四年に渡支、大陸に雄飛して南京、上海に居住、歌心は衰えを知ることなく、一六年には閨秀作家歌人若山喜志子とともに、大陸新報歌壇選者となり、華々しい活動を展開した。しかし、二〇年八月終戦となり故郷金山へ引き揚げた。公職追放で隠遁を余儀なくされたが、二七年追放解除となり、第一回村教育委員選挙に出馬当選、三期にわたって委員長を勤めた。

三三年には、不幸にして妻に先立たれ、超俗的な生活観の中に短歌と石を愛し続け、孤愁を短歌に托した。四四年に住み馴れた故郷金山を離れ、東京都に居住した。四八年六月一七日死去、享年七五歳であった。

『山峡の湖』から数首を拾ってみよう。

越えて来て山の時雨に汽笛吹けば峠の駅の灯がつきにけり
しつとりと夕冷えあがる倉じまひ力ふるひて俵もちこむ
しづけさはもえつくしゐてすさまじき紅葉の谿の落水の音
城壁に秋陽やうやく薄れゆき空のあかねのはるかなる海
ふるさとの山にかへりて悔一つ残さぬ今日の明るき光り
わが腕に抱かれてかへる屍のあまりにかろし不憫さましぬ
わが村の胴つ腹えぐり湖をつくる怖ろしきことぞ国策なるもの
不意に来し手足のしびれ頑なる老いのむくいに抱き込みし業か

次の一首は、四八年六月号「潮音」に発表されたもので、薫人の絶詠となった。

倖せはいつまでつづく恙なく齢を重ね今日は彼岸会

山名林蔵さんの歌碑がかなやま湖展望台に完成

（前略）歌碑建立は、一昨年遺作歌集が刊行されたのを機に盛りあがり、楯町長や舘内町議会議長、佐藤清二金山民主会々長をはじめとする地元関係者の方々や、山名さんと交流の深かった道内各地の歌友の人達が発起人となって、建設に伴う資金が集められるなど計画が進められ、このほど完成したものである。歌碑は、高さ幅ともに二メートルで、厚さが八〇センチのコンクリートに『この谷の底ひに冷ゆる陽のいろの…』の一首が刻まれた縦一〇五センチ、横一五一センチの砲金仕上げのプレートがはめこまれたもので、この歌は、金山をこよなく愛した山名さんにふさわしい作品として選ばれた。この日の除幕式には、楯町長や舘内町議会議長など地元関係者の方々と、富良野沿線や旭川、札幌、芦別などから、山名さんとゆかりの人達五〇

人余りが出席。神職のおはらいのあと、山名さんの孫山田敦夫さん（二一）と山名晶子ちゃん（六つ）の二人が除幕のヒモを引きこのあと、参列者の方々が次々に玉ぐしをささげて、歌碑の完成を喜びあっていた。また除幕式のあとは、金山青年研修所に会場を移して完成祝賀会も行われ、参会者達は、今はなき山名さんの思い出をしのんでいた。

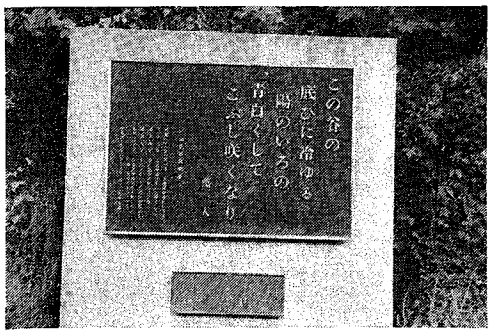
「広報みなみふらの」第二六九号・昭五四・九所収

註　広報紙記事中の短歌は、山名薫人歌集『山峡の潮』第二部「青あらし・萌ゆる」に収められている。

この谷の底ひに冷ゆる陽のいろの
　青白くしてこぶし咲くなり

この時期は昭和初期で、薫人は少壮気鋭の村会議員として活躍、政友会闘士として選挙運動に東奔西走、在郷軍人分会長の要職にもあった。

道内歌壇では、小田観蛍、山下秀之助、酒井広治、芥子沢新之助、戸塚新太郎、田辺杜詩花、鬼川俊蔵らと肩を並べる存在であった。



山名薫人歌碑

金川徳次郎

木がくれに人ひとり行く声きこゆ
こころ秋風幌馬車の歌

木原　作一

津軽の海日ぐれとなれば荒れぐせ
の波もうれしや今日の心に

金子　静光

仏法僧夜毎を裏の山にきて啼き更
かすなり梅雨に近づく

金子　幸友

宿業を背負うて我れの六十年悲喜こもごもの
世をぞ経て来し

山名　康郎

月に咲き夜目にも白く浮きいでし辛夷の花に
魂さそはるる

野原　水嶺

みづみづしく花あぢさゐの鉢おきて熱血の児は
やがてさけばぬ

清水　権録

この朝の山彦かなし人の手に売られてやがて
樵らるる山

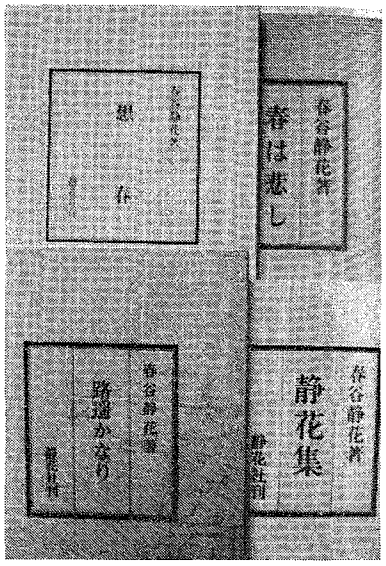
誰もかも悲壮蒼白のおももちに頭をふりて
はげます出征

清水権録は、金山潮音会では山名薫人に次ぐ歌人であった。清水権兵衛（下金山清水農場主）の長男として生を享けた。薫人の紹介で小田観蛍門下に入り、潮音にも入社、作歌に精進した。前掲二首は権録の歌集『山彦』（新墾社出版）から抽出した。昭和一〇年死去。

農民歌人春谷静花　鹿越住の農民歌人春谷静花（実徳）が、大正一三年（一九二四）以来の作歌活動を通して詠いあげた短歌を収録、歌集『ミューズを慕ひて』（発行所・中富良野潮音会）を発行したのは昭和三三年であった。

白けたる空を蜻蛉の一つ二つとぶ晩夏の

（大正一三年）



春谷静花の歌集等

午後は淋しも
美はしきミューズの神に抱かれん望みむなしく　（昭和二四年）

孤独に生きし
大いなる洋紙ひろげて父親が酔余の試筆
振ひしことども　（昭和三一年）

この歌集は『南富良野村史』を執筆した岸本翠月が、取材中に静花の埋もれた短歌に目を止めたのが動機となり、その尽力によって世に出ることとなった。翠月は「鍬を捨てず清貧に甘んじて誰の意見にも左右されず、ただ古典の中の人々にみちびかれて歌った魂の結晶である」と評している。鹿越が潮底に沈むため下金山へ転居したが、詩心を燃やし、創作活動を続けた。昭和五〇年一〇月一〇日には、歌集「静花集」を発刊、次いで五一年一月一〇日、小説「春は悲し」を発行した。

五一年一〇月一五日には、四季折々（浅春雑筆・春宵余情・夏の月・涼風漫筆・初秋随感・秋窓雑筆・冬日閑話・風窓雪景外）の感慨を詩情あふれるタッチでまとめた随筆集『想春』を発行、筆致はますます冴えをみせ、五三年一〇月一五日、小説『路遥かなり』を発行したが、六〇年三月五日他界した、享年八六歳であった。

大正三～一四年（一九一四～二五）にかけ、鹿越小学校長の職にあった阿波繁治（桃園）も歌人であった。

幾寅の短歌は、終戦後、幾寅中学校へ赴任した高橋和光が開拓、定塚照男、中島紅陽らが作歌活動を行った。

高橋は、潮音及び新墾の同人で、小田観蛍門下であり、落合、占冠村トマムにおいても、短歌の指導に当たり、本間緑星、沢山健三郎、遠山賢らの逸材を生んだ。

佐幌岳素晴れの空に起き伏しの山々抜きて　高橋　和光

深き藍かも
狩勝の峠を上る朝の汽車木華明るく空を澄ましむ　本間　緑星

黒土の感触もよしとぼしさに馴れて素足の
馬耕つづくる　沢山健四郎

石白く冷たく乾きゆく陽射しかかることすら
故郷は良き　遠山　賢

投炭のひまなき光茫暁暗の空こがしゆく峠路の汽車